

プロジェクトK

三友商事リヤド支店は、リヤド南部のビジネス・センター地区にあり、古くからの下町・アル・バタに近かった。石油省、治安対策の要である内務省などのある官公庁地区にもそれほど遠くはなかったが、慎太郎の滞在するアル・ファイサリア・ホテルのあるオレイヤ地区からは少々距離があった。

アル・ファイサリア・ホテルを出ると車は、ファハド大通りを南下して行った。ファハド大通りはリヤドを南北に走る基幹道路で街路樹の植えられた中央分離帯のある片側三車線の広い通りだった。一車線がゆったりと造られている上に、更に分離帯を挟んで両側に側道を持っているので、一層広々と見える。それでも、朝夕のラッシュ時には車で一杯になってしまう。

少し走ると、左手に内務省、右手にインターコンチネンタルホテルが見えてきた。車はその前を通り過ぎ、更に南へと

向かった。

会社の運転手はオスマと言う若いサウジ人だった。オスマも、サウジ伝統のトープを着用し頭にはシマーグをかぶりイ
ガールでこれを固定していた。ただ、彼はリヤドから遠く離
れたサウジ西南部のアシール州アブハの出身で、リヤド出身
のサウジ人とは大分外見が異なっていた。背丈はほぼ日本人
と同じくらいでほっそりとしていて色は浅黒かった。眉毛が
くっきりとされていて目鼻立ちの整っているところはリヤド
のサウジ人と一緒だったが、野性味があった。円らな瞳で眼
はいきいきとして光り輝いていた。女好きのする顔だった。

アブハは歴史と伝統を誇るイエメンに近く、文化的にもイ
エメン的色彩を強く持った人々が多く住んでいる。また、山
の上の都市で緑も多く猿なども見受けられる別世界のよう
なところだ。気候もサウジにしては珍しく、一年を通じて灼
熱となることはなかった。むしろ、冬にはストーブが必要な
くらい寒い。真夏でもクーラーがいらぬほどだ。

慎太郎は、ホテル・ファイサリアの玄関で笠原からオスマを紹介された時には、サウジ人の運転手がいるのに驚かされた。以前は民間会社にはサウジ人の運転手などいなかった。サウジ人の運転手は、タクシーと政府お抱えのロイヤルプロトコールの運転手(政府お抱え運転手)くらいだった。そもそも、サウジ人は、皆、人に使われるのが嫌いでたとえ小さな商店であっても経営者になることを望んだ。

それが、サウジ化政策の推進もあり変わったようだ。

サウジ化政策とは、民間企業のサウジ人従業員を増やそうとするもので、民間企業に一定比率のサウジ人の採用を義務付けたものだ。一九九四年に従業員が二〇人以上の企業に導入された。その後毎年５％以上サウジ化率を高めて行かなければならないとされていたが、なかなかその通りには進まなかった。それは、基本的には、やはり、人に使用されるのが嫌いというサウジ人氣質、それに、このクラスのサウジ人の場合、外国人労働者の方が圧倒的に優秀かつ勤勉であり賃金も低廉だったためだ。また、概ね英語が話せないと言う難点

もあり外国系の会社ではそれも使いにくい理由の一つとなっていた。

それでも、スーパーマーケットもそうだが、キャッシュヤーや店員などにぼつぽつとサウジ人が見受けられるようになって来ていた。

オスマは笑顔を絶やさず愛想は良かったが口数は少なかった。笠原によれば、それは彼の性格に加えて英語があまり喋れないためではないかとのことだった。

一五分ほど走ったところで、車は、ファハド大通りを右に出で側道に入り、しばらくそのまま直進した。そして、突き当たりのファハド大通りをまたぐ立体交差を左折してファハド大通りの左側へと入って行った。リヤド支店は、ちよつと入った、ホリディ・イン脇のサウジ投資銀行ビルにあった。大層分かりやすかった。慎太郎と笠原はオスマに礼を言って車を降り、笠原はオスマにひとまずこれで用事が済んだことを告げた。オスマは、慎太郎の方を見て、愛想良く、につこ

り笑うと、車のエンジンをかけ駐車場へと車を走らせた。慎太郎の目には、そんなオスマが決して知性的とはいえないが、かなり利発そうで親しみの持てる男のように映った。

サウジ投資銀行ビルは銀行のビルらしく警戒厳重だった。自動小銃を持った兵隊が一人づつ玄関の両脇に立っていた。玄関の中では別の警備員が数人でセキュリティ・チェックを行っている。笠原は警備員にID(身分証明書)を見せ、慎太郎が同じ会社のものであることを告げた。

広いホールには四基のエレベーターが設置されていた。笠原は、扉の開いていたエレベーターに慎太郎を先に入れ、自分からは後から乗り込むと五階のボタンを押した。エレベーターの中で、笠原は、リヤド支店が日本人五人、外国人七人の少数体制だから五階のワンフロアで広さは十分などと慎太郎に説明してくれた。

五階のドアが開くと目の前に受付があり、二人の制服を着た警備員が慎太郎と笠原を笑顔で迎えた。慎太郎が、おどけ

て二人に向かい敬礼をしてみせると、二人も笑いながら敬礼をした。笠原は、早速この二人を慎太郎に紹介した。

「池波さん、こちらがハリド、あちらがファハドです」

「ハリド、ファハド。東京から来た池波です。しばらくお世話になります。宜しく」

と言って慎太郎が握手を求めると、二人はおそろおそろ手を差し出し握手をした。

「アツサラーム・アレイコム(あなたに平安を)」

と慎太郎がアラビア語で挨拶をすると二人は目を丸くして驚いた。

そして、満面に笑みを浮かべた。慎太郎は、アラビア語の午後の挨拶も知っていたが、この二人がサウジ人ではないかもしれないと思い、全世界のモスLEMに共通で使えるこの挨拶を使ってみた。アラビアではアラビアの言葉で挨拶をするというのは定石だが、最初の敬礼、次の握手も効いたのか二人はとりわけ喜んでいた。

「アレイコム・サラーム(あなたにも平安を)」

と二人は応じた。

笠原によれば二人ともサウジ人だった。警察官、兵士でもない限りサウジ人は皆トーブを着ている。ホテルのサウジ人従業員もトーブ姿だったし、オスマもトーブ姿だった。民間人なのに制服を着ている二人を慎太郎がサウジ人ではないかもしれないと思ったのは止むを得ないことだった。

二人ともリヤド出身とのことだったが、慎太郎の知っている高級官僚のサウジ人とは大分様相が異なっていた。ハリドは上背があつたものの細身で、ファハドは背が低く細身だった。二人とも肌は黒く貧相だった。

ハリドは目がくりくりと大きくて唇が厚く、まるでアフリカの黒人のように見えた。これに対しファハドは目がより小さくて口も小さく、イエメン人のようだった。慎太郎は、彼等はきつと“ベド(サウジの遊牧民ベドウィンのこと)”出身に違いないと思った。

慎太郎が、おどけて、

「君達の名前は偶然前の国王と同じだね。キング・ハリド、キング・ファハド」

と言うと、二人は大きく頭を振りながら懸命に笑いを堪

(こら)えていた。慎太郎がサウジの前、元国王の名前をひきあいに出すなど思いも寄らなかったのだろう。

敬礼、握手、アラビア語の挨拶、そしてこの開放的でひょうきんな性格・・・二人とも慎太郎がこれまでの日本からの出張者とは一味違うなと思っていた。

そして、すぐに二人とも慎太郎の虜になった。

「ミスター・イケナミ、是非リヤドの滞在を楽しんで下さい」
ハリドはたどたどしい英語で精一杯慎太郎に語りかけた。

「有難う。ハリド」

慎太郎もサウジ人との短い会話を楽しんだ。そして、笠原に従い事務所の中へと入っていった。

ハリドとファハドは二人とも満面に笑みを浮かべ慎太郎に手を振りながら慎太郎が事務所の中に入るのをいつまでも見送っていた。

事務所の受付にはアラブ人らしい若い女性がいた。

その女性の顔を見て慎太郎はぎくりとした。

今朝、夢に出て来たレバノンの女性歌手ハイファ・ワハビそっくりだったのだ。違いと言えば、ハイファよりも唇がちよつと薄くアイシャドーがそれほど濃くなかつたくらいだ。

紅いバラの花のように、鮮やかで美しかった。

思わず、慎太郎の胸はときめいた。

その微妙な心の動きに気が付いたのか、彼女は小首をかしげ慎太郎に向かって愛想良く微笑んだ。そして、その長い栗毛色の髪の毛を軽く手で梳(す)いた。

彼女は色白でまさしく円らかな瞳をしていて、ふっくらとした豊かなその肢体を鮮やかなピンク色のワンピースに包んでいた。そのアラブ風のワンピースには金色の刺繡(ししゅう)がしてあった。

彼女の周囲には芳しい香りが漂っていた。それは、日本で

は嗅(か)いだ事の無いアラブ独特のものだった。慎太郎は、一瞬、自分は事務所の中にいるのではなく、どこかの花園に迷い込んだかのような錯覚を覚えたほどだった。

サウジ女性はアバヤ(女性用の黒装束)を身に纏い、ヒジャブ(黒いベール)で顔を隠していなければならない。サウジ人女性でないことは明らかだった。フランス人のように見えないことも無いが、治安の悪化で外国人が極端に少なくなっている筈なのでそれも無いだろう。

慎太郎はこの女性がアラブ系の外国人に違いないと思った。

「池波さん、こちらはラミアさんです」

笠原が慎太郎にその女性を紹介した。

慎太郎は欧米人の女性の場合には女性から握手を求めるのを待つのが常識と心得ていた。しかし、ラミアに惹(ひ)かれつい自然に握手を求めてしまった。ラミアも手を差し出した。慎太郎は、その柔らかな、しっとりとした、まるで手に吸い付いてしまいそうなラミアの手の感触に魅了され、つい

長い間握り続けてしまった。

笠原は、脇でそんな慎太郎を迷惑そうに眺めていた。

「こんにちは、ミスター・イケナミ。ラミアです。宜しくお願ひします」

ラミアは片言の日本語で挨拶をした。慎太郎にはそれがまた、たまらなく可愛かった。

「ラミアさん、こんにちは。こちらこそ宜しく」

慎太郎も日本語で応え、ようやく握手の手を離した。慎太郎の手にはラミアの移り香が残っていた。慎太郎は、その手の臭いをそっと嗅いだ。ラミアは優しく微笑んでいた。慎太郎も微笑み返した。ワンピースから覗いた肩から胸に至るラミアの白い肌は幾分紅潮したように見えた。

「池波さん、まず、支店長室に行きましょう。ラミアさん、支店長に池波さんが来たことを伝えて下さい」

笠原はラミアにそう英語で頼んだ。

ラミアは、思い出したように急いで電話の受話器を取ると、巻き舌の音がきついアラブ英語で支店長に池波が来たことを伝えた。

「支店長は、お待ちかねです。ミスター・カサハラ、それでは、ミスター・イケナミをお連れして頂けますか」

ラミアは笠原に言った。

残念ながら、このラミアは年内で退職することになっていると慎太郎は後に聞かされた。彼女は既にこの三友商事リヤド支店に三年ほど勤めていたらしい。美人で有能な、彼女が辞めるのは惜しいと皆口を揃えて言っていた。知り合ったばかりの慎太郎はガツカリしていた。ショックだった。

受付を抜けて直ぐの突き当たりを右に曲がった奥に支店長室があった。

笠原は支店長室のドアをノックすると、

「支店長、池波さんをお連れしました」

と言ってそのドアを開けた。

すると、恰幅(かっぷく)の良い支店長が既にドアのすぐ側に立っていて右手で中に入るよう招きながら言った。

「やあ、池波君、無事の到着おめでとう。この日を心待ちしていたよ。さあさあ中に入りたまえ」

そして、左手で慎太郎の肩を軽く叩くと大きな黒革の応接セットに座るよう勧めた。

「佐々木支店長、初めまして。お世話になります」

慎太郎は笠原と伴に応接セットに座った。佐々木は高価そうな金縁の眼鏡をかけていた。それほど身長は高く無かったが、がっちりした体格だった。東京を出る前に石渡に聞いた話では佐々木は石渡の母校早大の後輩で剣道部出身とのことだった。

「石渡専務からはじきじきに電話があつて、くれぐれも宜し

くと言われている。専務は君がわが石油エネルギー事業、いや、わが社のエースだからと言って随分君を買っていたよ。わしの担当は自動車だが、やはりエネルギーには深い係わりがあるし親近感はある。それに、聞いたかもしれないが石渡専務は大学の先輩だから格別だ。及ばずながら君の手助けをしたいと思います。遠慮なく何でも相談してくれたまえ」

佐々木は人の良さそうな笑顔で慎太郎に語った。

「支店長、有難うございます。それに、石渡専務のお気遣いは大変有り難いですね。期待に応えられるよう頑張りたいと思います。ところで、支店長はお聞き及びかも知れませんが、実は私はリヤドがこれで二度目なのです。リヤドのことは、それなりに良く知っているつもりでいます。でも、この一〇年間でリヤドも大分変わってしまったと思いますし、当時と比べると治安が大分悪化しています。従って特に治安には細心の注意を払いながら生活する心構えでいます。くれぐれも宜しくお願いしたいと思います」

と慎太郎は応じた。

「どこの国でも落ち着くには時間がかかるものだが、この国

では特に時間が掛かる。それに、今は君の言った通り治安問題を最優先に考える必要があるので、じっくりと時間を掛けて住宅などを探してくれ。わしも昔剣道をやっていたとは言え銃で襲われたら一溜(ひとたま)りもないしな。ワツハツハ」

佐々木は慎太郎の方に向かって両手でライフル銃を構える仕草をしながら愉快そうに言った。

とても、極度に緊張したこのリヤドに駐在している支店長の態度には見えなかった。慎太郎は、気さくで豪放磊落(ごうほうらいらく)らしく佐々木の人柄が直ぐに気に入った。

「君、重ねて言うがセキュリティが高いというのは必須だよ。笠原君には十分なアドバイスをするよう頼んでいる。君の専用と云う訳にはいかんが今日君を迎えに行った社用車を付けるつもりでいるので遠慮なく使ってくれ。それから、十分に分かっているだろうけど、君はリヤド支店配属となったわけではないので、こちらの仕事は手伝わんで結構だからな。一切、気を使わないように。特命プロジェクトに専念してくれ。そのために君には特別の部屋を用意しておいた」

「大変助かります。専用の部屋とは言え、昼寝をするようなことはしませんので」安心願います」

慎太郎は、佐々木が特命プロジェクトのことを聞くのではないかと心配しながら、きさくな佐々木の人柄に安心して、そう応えた。

「そうかね、いや、昼寝をしてもらっても一向に構わない。サウジ人は、さらにお茶を飲んで無駄話ばかりしているようだが、君はそのようなことはないと思っているよ。無事、プロジェクトを成就してくれるものと確信している。ワッハッハ」、

「今回の特命プロジェクトの名前は“プロジェクトK”とだけ聞いている。これだけでは何のことやらさっぱり分からん。Kはキングダム・オブ・サウジアラビア(サウジアラビア王国)の頭文字をとったのだろうかね。まあ、関心がないわけではないが君に聞くわけにはいかん。君の指揮命令系統は全く別だから説明は不要だ。こちらも一切気を使わんで良いよ。そうそう、そう言えば、さっきアルコバル支店の南君から電話があった。彼こそ、君と同じ指揮命令系統に居て

君の到着を待ち焦がれていたから君の部屋から連絡をとってみてくれ。それから、君には携帯電話も用意しておいたからね」

「有難うございます。それでは、早速、南君に電話を入れさせてもらいます」

「宜しく」

「笠原君、それでは、池波君を専用室にお連れしてくれ。専用室とは言っても余っていた小会議室に机と椅子を入れただけだがね。ワツハツハ。それじゃ、また」

そう言っつて、佐々木は立ち上がった。慎太郎、笠原も続いて立ち上がった。

「それでは、池波さん、お部屋にお連れします」

と笠原は慎太郎に向かって言った。

治安が悪化してから日本人はリヤドから続々と離れていったが、三友商事もそうだった。支店の従業員数は最盛時の半分ほどになっていた。佐々木は冗談気味に余っていた小会議室と言っつたが、事務所スペースに余裕が出来ていたことは

事実だった。

専用室には大きな窓があり、その窓の側に机と椅子が置かれていた。元小会議室と聞いたので、あるいは窓がないかもしれないと慎太郎は危惧していた。その明るい窓を見てホッとした。机の上にはパソコンと電話が置かれていた。また、佐々木の言った通り携帯電話も既に用意されていた。部屋には六人程度が会議の出来る机と椅子もそのまま置かれていた。専用室の用意は、慎太郎が他の従業員に気を使うことなく自由に電話出来るようにと配慮されたものだ。石渡からの強い要望があったせいかも知れなかったがリヤド支店の格別の好意は有り難かった。慎太郎は、プロジェクト成就に向けて一段と気合を入れなければいけないと改めて思った。

笠原は、パソコンの使い方、電話の掛け方などを簡単に説明してくれたが、海外経験の多い慎太郎には全て簡単に分かった。また、英語表示のノキア製の携帯電話もすぐに使いこなせた。

説明を終えると笠原は部屋を出て行った。

慎太郎は、早速、笠原に教わった通りダイヤルしてアルコバール支店に電話を入れてみた。南は、とりわけ慎太郎の到着を喜んでくれた。

「いらっしゃーい。ご到着をずっと待っていました」

電話の向こうの南の声は弾んでいた。

南は、気が置けない、有能な部下の一人だった。南とはアルコバールに赴任する直前まで東京で机を並べて仕事をしていたし、慎太郎のリヤド赴任についても電話で充分に話していた。しかし、こうしてリヤドに到着して話をすると、また、別だった。

南の弾んだ声を聞いて、慎太郎の心も躍った。このサウジで、また、南と一緒に仕事が出来るのが嬉しかった。

「今回は随分難しい仕事で大変ですね。リヤドで石油省が相手ですからアルコバールから直接協力し難いのですが全面的にバックアップさせてもらいます。ただ、いずれ、こちらのサウジアラムコ(国営石油会社)と調整する必要も出て来るでしょうから、その時はお役に立てるものと思います」

慎太郎は、一刻も早く南と会いたかったが、残念ながら、

そうは行かなかった。

「有難う。是非、君と会いたいね。ただ、僕はまず住む所を決めなければいけないし、セツルメント(住居を定めて落ち着かせること)に忙しいからアルコバールにすぐに行くわけにはいかない。そのうち、リヤドで会えると有り難いね」

「リヤドには仕事だけではなくビザ関係などで時々行かなければいけませんから、その機会はあると思います。その時を楽しみにしています。ところで、早速ですが、宜しければ石油省のカウンターパート(相手)の名前と彼の電話番号を言いますからお控え願いますか」

慎太郎は、早速メモをして近々石油省に挨拶に行くつもりであることを南に告げた。

「池波さん、まあ、ゆっくりと行きましよう。ご存知の通り、

この国では、時計がゆったりと流れていますから」

南は、まだ、サウジに来てから半年ほどしか経っていないが、大分サウジのことが分かってきているようだった。

「そうだね。そう言うてくれると気が休まるよ。“この国では時計がゆったりと流れている”なんて、君は、短期間の内

に、随分とサウジのことを学んだんだね」

「ええ、まあ、そうですね。アラムコのサウジ人と付き合い合っていると感じすることも多いですよ」

サウジ赴任者は他の国への赴任者と比べると、その国に対する印象が極端に二つに分かれてしまるのが特徴だった。サウジ人との付き合いに懲りて毛嫌いするようになってしまふものと、アラブ文化や生活などに強く惹かれ、好きになっってしまうものである。南はいつも後者のようだった。これまでも、石油担当にはそんな者が多かった。

「へえ、そう。それは良かったね。君はアラビア語が堪能だから、サウジ人とは直ぐに仲良くなれて得だよな。後でいろいろと教えてもらわなければ・・・」

「池波さん、お言葉ですけど、アラビア語が出来るのは良い悪しなんですよ。時には、警戒されてしまふんですね」

「そう。そんなもんかね。ところで、“感じることも多い”と言っただけど、例えばどんなこと」

慎太郎は、ほんの話のつなぎでそう聞いてみた。

すると、

「そうですね。まあ、一つは、彼らには、“愛”があるというところですかね」

南は、冗談ぽく、そう言った。

「……………」

慎太郎は南の意外な答えに声が詰まった。確かに、イスラムを軸にした彼らの生活は、夫婦の絆、親子の絆、家族の絆、友達の絆が強い。運命共同体のようなところがある。しかし、彼らにも新聞の社会面を賑わす家庭内の騒動があるんじゃないかなどと聞いてみたかったが、思い止まった。その雰囲気には、南も気が付いたようで、直ぐに続けて言った。

「池波さん、いきなり驚かして済みませんでした。最初から核心を突いちゃいましたかね。ちょっとおかしかったですよね。では、その辺りは、また、後でということですね。」

冗談ぽく言いながら物事の核心を鋭く突いてくる・・・

慎太郎は、南が相変わらず変わっていないなと思った。

南は、とにかく慎太郎と話が出来て嬉しかったようだった。

アルコバール支店は、日本人の一人事務所だったから、寂しくしていたのだろう。

「うん、宜しくね。南君、今日は、リヤドから話が出来て本当に良かった」

話は尽き無かったが、慎太郎は、取り敢えずは挨拶程度に止めることにした。

「言うまでもなく、君のいる東部地区はサウジアラムコの重要施設もあり、この国の心臓部だから、テロリストも最優先の攻撃対象としているのでくれぐれも気を付けてくれ。それじゃ、また」

そう言って慎太郎は受話器をゆっくりと置いた。

そして、慎太郎はアラビア石油が失ったと同じ程度の石油権益を手に入れることが一体出来るのだろうかと考えていた。勿論、慎太郎は、メジャー国際石油会社で構成されていたアラムコでさえとつくの昔に全資産を買収されサウジアラムコ(国営石油会社)へと変貌せざるを得なかったこと、そして最近の資源ナシヨナリズムの高まりを良く知っていた

ので、決して、以前と全く同じ権益が得られるとは思って
なかった。しかし、相互信頼に基づいた、より親密な関係を
背景にした権益獲得はあり得るものと思っていたし、また、
そうでなければいけないと固く信じていたのだった。

慎太郎の部屋からは大きな赤い夕日が水平線の彼方に沈
んで行くのが良く見えた。